

松陰

第 14 号 1988. 7

「あの人は運動神経がよいから、手が器用である」といった表現がよく聞かれるが、運動神経とは脊髄の運動ニューロンから筋肉細胞へのびている軸索の集まり(神経)のことである。この軸索の働きは、神経パルスを筋肉へ伝えることで、軸索のちがいによって神経パルスの伝導速度がちがってくる。だから運動神経の性質がちがっても運動の器用さが変わるものではなく、運動のおこる速度がちがってくるだけである。だから「運動神経がよいから器用だ」というのは正しくない。それでは、手が上手に使えるとはいったいどういうことなのであろうか(杉浦妙子先生の随筆一字の上手・下手はどうして—松陰、第13号、をうけて)。

私たちが手を自由に操れるのは、神経が手と脳の間の中立ちをしているからで、脳が外部環境の情報を受け入れると同時に、その情報を基に適切な指令を出して筋肉を適切に収縮させているからである。手が上手に使えるのは脳を上手に使えるからで、脳の働きにその秘密がある。「手は外部に開かれた脳である」という言葉はこの関係をうまく表現している。字の上手、下手が「手の器用さ」の一つの現れと考えれば、器用な運動(字が上手)とは、要素的な運動がつつぎとぎと協調しておこなわれ、余分な筋肉が使われず、目的に向かって適

切な時間に適切な筋がちょうど適切な力を出して動くような運動のことである。ではいったい、いつ、どのようにしてこのような「手の器用さ」がきまるのであろうか?

手にかぎらず身体活動の修得過程を「運動学習」という。その背景には運動の記憶が大切である。それがいつ、どこに、どのように形成されるかは未だ不明な点が多いが、運動の発現に関係してい

る大脳皮質や小脳皮質のニューロンのシナプス(注4)であろうと考えられている。これは幼少の時にその基礎がつくられるが、年をとってもストップするものではなく、年をとると速度が遅くなっているに過ぎない。器用さの研究成果からは、「手を器用に

は て な
不思議?
「運動神経がよい」
とはどういうことか
体育学部助教授 笠井達哉

するには、まず手を使うことである」という、ごく常識的な結論しか導き出せないが、一番大切なことは運動を繰り返して行うことで自信が生まれ、運動することが(字を書くことが)楽しくなることで、さらに意欲がわいてきて運動を続けるようになることである。運動することが積極性を生み、これが前頭前野を刺激することになる。ヒトの最も高次な精神機能を司る前頭前野を常に刺激し続けるためには、ヒトは手を使い続けねばならない。

※注)は2頁へ

卒論のテーマが決まったら 図書館と仲良くしましょう。

卒論を書くために、図書館を
いかに利用したらよいのか、
アドバイスしてみました。

■「卒論のための資料の探し方

皆さんがこれから卒論の参考資料を探そうとするとき、卒論のテーマについて質のよい情報をもっているかどうかによって、たぐり寄せた資料が、大して役に立たなかったりすることがあります。

はじめにテーマについて予備知識を蓄えるため、関係ありそうな専門事典を見ましょう。**辞書解題辞典** 東京堂 [020.33-J54] や**辞典事典総合目録** 出版ニュース社 [028-J55] で、どんな専門事典が出版されているか調べることができます。

事典は一つではなく、なるべく多くの本を見るようにします。そして、関係ありそうな項目を片っ端から見ていきます。このときに得られたキーワードが、これから資料を探すときの手がかりとなります。キーワードは多数もっていた方が有利です。

特定のテーマに関して、どんな資料があるか効率的に探す道具に書誌があります。書誌は、図書や雑誌記事、ときには新聞記事まで含めて、過去に発行されたものを網羅的に一覧できるようにしたリストをいいます。

書誌には、資料を選択するという機能もあります。書誌を利用すると、関係文献が多く有り過ぎて困るという贅沢な悩みの起きることが、間々あります。しかしよく確かめると、テーマに本当に役立つ資料は数点しかない筈ですから、時間を掛け、問題意識をもって選別します。この選択を間違えたとき、卒論の出来ばえが決定されます。

皆さんは、限られた期間内に卒論を完成させなければなりません。書誌を使った組織的な資料検

索法を知り、それによって余裕の生じた時間を、資料自体を読み込むために使うべきだと思います。

では、あるテーマについてどんな書誌があるか調べるには、どうしたらよいでしょうか。このためにあるのが書誌の書誌といわれるもので、これには**主題書誌索引** 日外アソシエーツ [028-F71]、**書誌年鑑** 日外アソシエーツ [020.59-Sh96] などがあります。

このようにして書誌を利用し、必要な文献が見つかったら、当館に所蔵しているかどうか確認します。当館にない資料は、**学生受入希望図書制度**を利用して、図書館へ蔵書として入れて貰い、それを利用するか、国立国会図書館・各種の専門図書館・他大学図書館等へゆき、利用させてもらいます。紹介状が必要な場合は、カウンターで発行します。また、希望者には資料を他大学図書館等からコピーで取り寄せますから、活用しましょう。

(渡辺)

注) []は当館の請求記号

(1頁より続く)

注1) [neuron] 神経細胞体とそれから出る突起とを併せた名称。

注2) [axon] 神経細胞から発する一本の長い突起。

注3) [pulse] 極めて短い時間だけ流れる電流。主に比較的弱くて信号としての機能を果すものを指す。

注4) [synapse] ニューロンすなわち神経細胞相互間の接続関係またはその接合部の称。

(広辞苑第3版)

■雑誌の利用Q & A



卒論のテーマが決まったが参考となりそうな論文を探すにはどうすればよいですか。

一番ポピュラーなのが、国立国会図書館編集の雑誌記事索引です。人文・社会科学編は昭和23年より刊行され、

科学技術編は昭和25年より刊行されています。この索引は、最近では年4回発行されるため新鮮な学術誌を中心に採録されています。検索は、あなたが探すテーマに該当する分類項目または執筆者名から該当論文を探すことができます。

また、この人文・社会科学編には、累積版があります。これは分野別に、5年または10年分の論文をまとめて編集してあるため論文を極めて効率よく探し出すことができるので非常に便利です。

その他の索引誌では、各分野別の雑誌文献シリーズ(日外アソシエーツ発行)があります。検索は、キーワード方式で、体系的に排列されているので利用しやすいと思います。



見たい論文名と掲載された雑誌名はわかるのですが、巻・号・出版年がわかりません。

この場合、雑誌名がわかっているで、その雑誌の総目次また、総索引を利用するとよいと思います。この

とき、年単位及び号単位のように形態が、各々まちまちであるため要注意です。また、必ず総目次・総索引が発行されているとは限らないため日本雑誌総目次要覧により刊行の有無を確認してください。



本学に所蔵していない雑誌を見たいのですがどうしたらよいでしょうか。

まず、第一に国立国会図書館所蔵国内逐次刊行物目録で所蔵を確認して直接国立国会図書館で閲覧するのが

一番早いと思います。この目録には、約5万8千誌を収録しています。しかし、この目録に収録されていない場合は、学術雑誌総合目録と文編を検索して下さい。この目録は、国・公・私立大学及びその他の団体機関623機関を収録対象としていますのできっと収録されていると思います。そして探しあてたら、文献複写サービス(実費)または、紹介状の発行をうけ所蔵館へ直接出向き閲覧することもできます。

(雑誌係から一言アドバイス)

資料入手がむずかしいと思っているあなた、文献探索の工程をキチンと踏んでいくとほとんどの資料は入手できるはずですよ。卒論の課題が決まったらすぐにアクションを起こして下さい。数多くの論文が、あなたの卒論に輝くその日を待っています。

(宮田)



■「分類記号」の意味するもの

「分類」の方法には、数字の十進法を利用して、学問や芸術の主題と、内容、形を数字によって体系化する方法もあります。

まず、総記0、哲学1、歴史2、社会科学3、自然科学4、工学5、産業6、芸術7、語学8、文学9という具合に大別されます。歴史を例にとってみると、「210」は日本史、「220」はアジア史、「230」はヨーロッパ史というように地理区分されます。日本史の中ではさらに細かく「211」は北海道、「212」は東北、「213」は関東と地方区分されます。

次に社会科学の場合は、「310」は政治、「320」は法律、「330」は経済というように主題別になっています。さらに細かくみると、「321」法学・法哲学、「322」法制史、「323」憲法というように大

きな主題から小さな主題へと合理的に、しかも学問の体系をできるだけ損わないようにして、数字に置き換えて展開されています。

学問は主に主題で分類されますが、芸術は、形でしか分類できません。例えば「710」彫刻、「720」絵画、「730」版画という具合です。「780」はスポーツですが、斉藤仁選手の柔道は「789」武道の中の「789.2」柔道のところに分類されています。

学問の主題による分類も、芸術の形による分類も、不十分なことは確かです。アリストテレスの言う通り、「極めて美しい絵具を使って、流れ出るまま描いたとしても、本物の絵画が惹き起す感動には及びもつかない」ということでしょうか。

(杉浦)

■卒論における月報の利用

個人著作集・個人全集または叢書・シリーズものには『月報』という10ページほどの冊子体の付録がついていることが多い。では、月報とはどんなもので何が書かれているのだろうか。

個人著作集や個人全集の月報では、その著者自身の人間性をかいまみることができる。なぜなら、月報執筆者は著者自身であったり家族（遺族）・友人・その著者の研究者であったりと身近な人が書く場合が多いからだ。著作ではどうも知り得ない著者に関するエピソードや、著作が書かれた時代背景なども月報を読むことで分かることが多い。卒業論文に作家研究をとりあげる場合、月報は思いのほか役に立つ。ちょっとした言葉や写真（写真も掲載されている）がヒントになることがあるからだ。

月報は卒業論文のためばかりに役立つのではな

く読み物としても大変おもしろい。私事であるが最近読んだ月報でおもしろかったのは「全集 黒澤明」である。映画の画面ではみられない監督黒澤明の人間性がそこにあったからである。

叢書・シリーズものの月報には、おもにその月報が付いている本書の紹介やその叢書に関することが書かれている。なかには、「鎌倉遺文」の月報のように資料的価値の高いものもある。また、「法律学全集」のように各巻の著者が、その本を書くにあたっての思い出や苦労などを書いているのも興味深い。

当館における月報の扱いは二通りある。ひとつはまとめて合冊製本してあるもの、もう一方は各本に貼ってしまうものとである。前者に該当するものは個人著作集や個人全集であり、後者においては叢書やシリーズものなどがそれに当たる。

(浦田)